

第13回適塾講座

全3回

A Narrow Bridge (一本の細い橋)

～オランダと日本、400年の交流史から

会場：大阪大学中之島センター
講義室703(7階)

今年、適塾記念センターは、アムステルダム国立美術館が制作した日本オランダ関係史『A Narrow Bridge』を翻訳し、大阪大学出版会より出版しました。同書は、同美術館他所蔵の美術工芸品や歴史資料をフルカラーで紹介しながら、400年を超える両国交流史を描いたものです。オランダは日本がもっとも長く付き合った西洋の国。今回の適塾講座は、同書の出版を記念して、両国交流史にまつわる人間のドラマにフォーカスします。

コーディネーター：松野 明久(大阪大学大学院国際公共政策研究科教授)

主催：適塾記念センター・適塾記念会 協力：大阪大学共創機構社会学共創部門

第1講座 10月29日(木) 18:30～20:00

長き夢より覚めてのち～幕末以後の日蘭関係

黒船来航を機に日本は激動の転換期に突入する。太平の世の終焉とともに、2世紀半近く続いたオランダと日本のおだやかで奇妙な関係も終わり、両国は帝国主義列強が競う国際社会でそれぞれの道を歩み始める。講座では、近代国民国家への脱皮を果たした日本が次第にオランダとの関係を組みかえていく歴史を辿る。

松野 明久

(大阪大学大学院国際公共政策研究科教授)

1956年熊本県生まれ。東京外国語大学・同大学院修了、文学修士(1982年)。専門は国際政治、紛争研究。1986-1988年ライデン大学で、1996年リスボン大学にて研究。著書に『東ティモール独立史』(早稲田大学出版部、2002年)。共著に『グローバリズムと公共政策の責任』(大阪大学出版会、2016年)、共訳に『A Narrow Bridge(一本の細い橋)』(大阪大学出版会、2020年)等がある。

第2講座 11月19日(木) 18:30～20:00

17世紀バタヴィアにおけるオランダ人と欧亜混血児

17世紀オランダはジャワ島西部のバタヴィア(現ジャカルタ)に交易拠点を設け、香辛料交易を通してオランダ海洋帝国を築いた。当時バタヴィアには、西欧人や欧亜混血児、東洋外国人、現地人など様々な人種が生活していた。平戸からバタヴィアに追われた、オランダ人と日本人の混血女性「おてんば」コルネリアの奮闘は有名であるが、この当時のバタヴィア社会についてもう少し詳しく解説したい。

菅原 由美

(大阪大学大学院言語文化研究科准教授)

1969年東京都生まれ。1998-99年ライデンの王立言語地理文化研究所(KITLV)にて調査。2002年に東京外国語大学大学院地域文化研究科より博士学位を取得。2003年に第2回井植記念「アジア太平洋研究賞」、2014年に「東南アジア学会賞」を受賞。主な著書として「オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動」。専門はインドネシア史、東南アジア・イスラーム史。

第3講座 12月10日(木) 18:30～20:00

"Feeling 'at home' in the Netherlands? The experience and importance of the Takenouchi mission (1862-1863) in the Netherlands in a comparative European perspective"

オランダで「ふるさと」に帰った気がする? オランダにおける文久遣欧使節(1862-1863年)の体験とその重要性～ヨーロッパからの比較の視点で

幕末、江戸幕府は欧州諸国と約束した開港開市の延期を求めるため、竹内保徳を正使とする使節を派遣した。この文久遣欧使節はオランダに一月余り滞在した。使節団に加わった福澤諭吉はオランダを第二の故郷と表現した。使節は丁寧なもてなしを受け、延期交渉を成功させた。一方で、オランダでは日本に対する積年の不満が表面化した。講座では、使節の経験とその意義をオランダ側資料をもとに見ていきたい。

ヤニー・デ・ヨング

(グローニンゲン大学教授)

1983年グローニンゲン大学文学部卒、1989年同大学院修了(Ph.D.)。グローニンゲン大学日本学センター所長。専門は歴史学、特に非西洋世界、東アジア(日本等)の歴史。テーマは植民地主義、帝国主義、グローバリゼーション。「Fin-de-siècle in Japan: Westerse en Japanse perspectieven op modernisering, decadentie en verval (Groniek. Historisch Tijdschrift, 51 (219)) (2019) (世紀末の日本:近代化、退廃、衰退についての西洋と日本の視点)他論文多数。

※12月10日(木)の講座は、会場にて海外の講師とインターネットで繋ぎ、コーディネーターが日本語で説明・通訳するものです。

令和2年度 大阪大学適塾記念講演会

大阪大学適塾記念センター・適塾記念会では、適塾・緒方洪庵および適塾生の業績を顕彰するとともに、毎年、適塾記念講演会を開催しています。皆様のご参加をお待ちしています。

主催：大阪大学・適塾記念センター・適塾記念会 協力：大阪大学共創機構社会学共創部門

12月8日(火) 18:00～20:00

会場：大阪大学中之島センター
佐治敬三メモリアルホール(10階)

講演
1

社会と科学技術の関係～過去50年を振り返る～

新しい知識を生産することだけを生業とする集団(=科学者、科学技術者)を人類が抱えて、150年余りになる。この集団の影響力は徐々に増し、ここ50年は社会の運営、発展に必要な不可欠な存在になっている。社会は科学技術とどのような関係を取り結ぶべきなのか、いま大学の果たすべき役割と絡めて議論したい。

■ 小林 傳司(大阪大学COデザインセンター特任教授)

1954年京都市生まれ。1978年京都市立大学理学部卒業。1983年東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論専攻博士課程修了。専門は科学哲学、科学技術社会論。福岡教育大学、南山大学を経て、2005年4月より大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、2015年9月から2019年8月まで大阪大学理事・副学長、2020年3月退職、名誉教授。

講演
2

量子情報・量子生命が拓く未来～今なぜ量子なのか～

量子コンピュータで急速に注目を集めている量子情報の研究について、黎明期から現在までの発展を振り返り、今なぜ量子なのかを考えます。量子コンピュータと量子生命科学が拓く人類と地球の未来を展望します。

■ 北川 勝浩(大阪大学大学院基礎工学研究科教授)

1958年大阪出身。大阪大学工学部卒業。同大学院工学研究科博士前期課程修了。日本電信電話公社電気通信研究所、NTT基礎研究所主任研究員を経て、1993年大阪大学基礎工学部助手。博士(理学)。講師、助教授を経て、2003年から基礎工学研究科教授。2020年3月から先導的学際研究機構量子情報・量子生命研究センター長。